外国人日本語学習者を対象としたシーン検索システムの試作

藤田 真一(早稲田大学メディアネットワークセンター)
保坂 敏子(日本大学総合科学研究所)
戸部 祐一(早稲田大学理工学部)
成田 誠之助(早稲田大学理工学部)
chamois@toki.waseda.jp

概要

語学教育において、特に話し言葉を学習する場合、その言葉が実際にどのような場面・表現で利用されているかを知ることは重要である。また、文字情報だけでなく、身振り手振りや表情などの非言語情報もより自然なコミュニケーションには必要である。そのため教師が授業中にビデオなどの視聴覚教材を用いることも多い。しかしながら、ある特定の表現を授業中に取り扱おうとした場合、その表現ごとに膨大なビデオの中から該当する表現が含まれているシーンをひとつひとつ探し出していくのは困難である。そこで発表者らは、映像中のシーンをいくつかの条件を指定し検索できるシステムを試作したので報告する。現在のシステムは日本における就職活動において、友達、面接官といったように相手に応じた話し方や表現を学習することができる。また、単語でのシーン検索機能を利用すると、例えば「すみません」という単語で検索し、異なるシチュエーションでの「すみません」を見比べるなどといった学習方法が可能である。

1　はじめに

日本で日本語を学習する留学生の数は年々増加している。日本語を学習している留学生に対して、現在の日本語教育においては以下のような問題点が挙げられている。

ア）教科書と実際に使われている日本語の相違。来日した外国人から、教室の中の言葉、教科書で勉強した言葉と実際使われている日本語は違うという声がよく聞かれる。その理由としては、教科書で扱う言葉というのは規範的で、標準的なものであるのに対して、実際の話し言葉は、言語変種が多い（男女差、年齢差、地方差、などによって話す言葉が違う）、様々な音の変化、省略などが起こる。

イ）留学生は言葉が全て聞き取れても、メッセージが読み取れないことがある。このことによって日本人との円滑なコミュニケーションができないことが多い。

以上のことを踏まえ、話し言葉を学習できる教材が必要、また会話メッセージを読み取る練習が必要であると考え、本研究では、映像（映画）を使用した日本語学習教材の作成に取り組むことにした。映画教材を利用することにした理由としては、「規範的な会話・音声言語だけでなく、自然な日本語のやり取りが勉強できる」「メディアの発達、日本のサブカルチャーの浸透により、映画・アニメ・ドラマなど生の映像素材を使って勉強したいという要望が高い」「自然談話（日本人が話すふつうの会話）に比べ、シナリオは、ある程度会話が統制されているので、話にまとまりがある」などが挙げられる。

2　システムの概要

本システムは学習対象者を日本で日本語を学習している外国人留学生とし、丁寧語を主体とした文法の授業ではなく、日常会話や、表情などから読み取れるニュアンスなどを教える際に教授者　あるいは、教師が補助的に使用するという位置付けをしている。その中でも特に、話し相手による口調の違いや会話の種類、縮約形、倒置などに着眼し学習することを目的としている。

使用する教材としてデジタルカメラで撮影されたオリジナルのドラマを用いた。内容は登場人物である大学生３人（男２人、女１人）が就職活動を進めていくもので、ドラマ仕立てになっている。登場人物の関係は、「友人」「知人」「他人」の３種類に分類される。就職活動を５つの部分に分け、それに就職活動を始めるきっかけとなる雑談と、就職活動を終えた後の雑談を加えた計７場面、１０種類の映像（面接、結果発表は３人分あるため）からなる教材である。会話の種類は限定されてしまうが、登場人物の個性、また、相手と野関係によって話し方に差異が見られるので、また、現実に近い口調で会話が行われているので、この教材を用いることにした。

３　システムの詳細

3.1 システムの流れ

システムの詳細を説明する前に簡単にシステム全体の構成と流れを説明する。図 3.1.1 にシステムを利用する際の流れを示す。

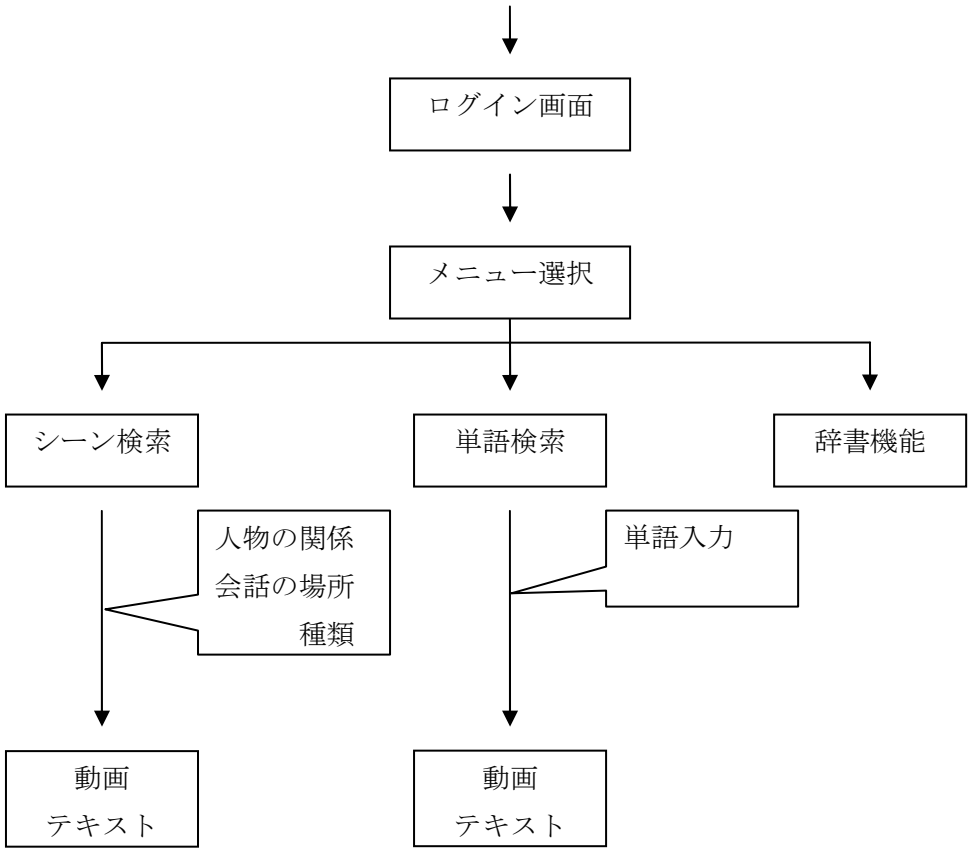

図 3.1.1 システムの流れ

本システムはシーン検索機能、単語検索機能、シナリオ解説(辞書機能)の３つから成り立っている。

シーン検索機能を用いることにより、登場人物の関係や場面、会話の種類を特定して敬語、若者言葉、省略、倒置などの文法やイントネーションなどを学習することができる。学習方法も動画とテキストを用意することにより、用途に応じて視覚と聴覚による学習を使い分けることができる。

単語検索機能では、同じ言葉で異なる意味を持つもの、異なるニュアンスを学習することができる。たとえば、「すみません」という語には、謝る際と知らない人への呼びかけの際とふたつの使い方がある。また、近年若者が使う日本語には本来の意味と異なる意味で使われる言葉が少なくない。例えば、「全然食べれる。」という会話を考えてみると、「ら」抜き言葉は以前から問題視されていたが、最近では「全然」という語が「全

然～ない」という意味では使われず、「全然～できる」という肯定文で使われることが多くある。このような文を聞いたときに日本語を学習している留学生には学習した文法と違うと感じたり、また、日本人と会話をしていても話が通じないだろう。本システムの単語検索システムでは、このように、単語は知っていても使い方を知らない、あるいは文法と違う使われ方をする日本語を学習するときに、日常会話に近い文を参考に学習することができる。

シナリオ解説機能(辞書機能)では単語の意味、英訳を学習することができる。

次項からはシステムの詳細を実際に利用する際の流れに沿って説明する。

3. 2 ログイン部分

システムを利用するユーザはまずログイン画面でユーザ名とパスワードを入力する。サーバ側にはあらかじめ Microsoft Access2000 を用いてデータベースに学習者の ID とパスワードを登録しておき、作成されたデータベースを参照し、該当するユーザ名およびパスワードが登録されていればメニュー画面に進むことができる。

3.3 ユーザ認証部分

ユーザ認証により、認められたユーザはメニュー画面から使用するシステム(シーン検索・単語検索・シナリオ解説)を選択することができる。各システムについて次項より説明する。

3.4 シーン検索部分

ユーザはまず、「主人公との関係」「場所」「会話の種類」の項目について条件を選択し検索する。一致したものが検索結果部分に表示されるので、視聴したいシーンを選択する。その際に字幕の有無とテキストの表示を選ぶことができる。図 3.4.1 にシーン検索システム画面を示す。

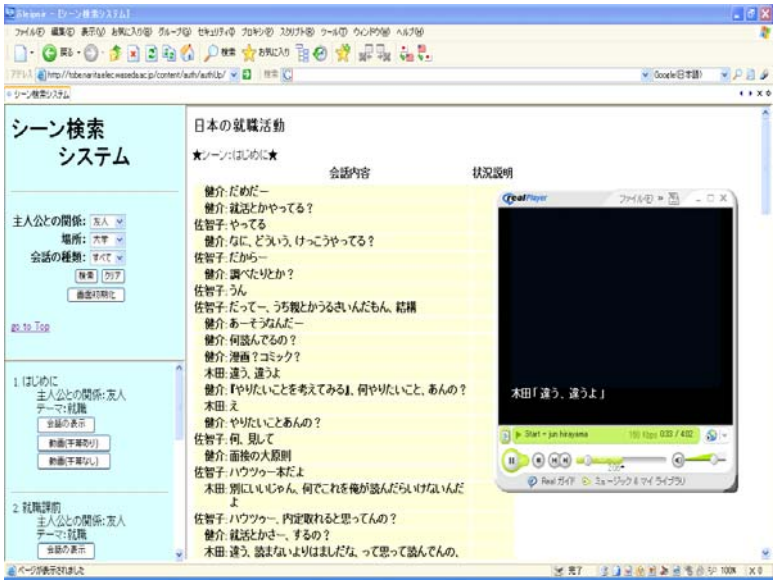

図 3.4.1　シーン検索システム画面

3.5 単語検索部分

単語検索システムでは、ユーザは調べたい単語を入力し検索する。入力した単語を含む文が検索結果に表示されるので、その単語がどのように文の中で使われているのかをテキストおよび動画を用いて学習する。動画に関してはその前後の会話を視聴することができるので、登場人物のやりとりを見て、検索した文が使われている状況なども学習することができる。図 3.5.1 に単語検索システム画面を示す。

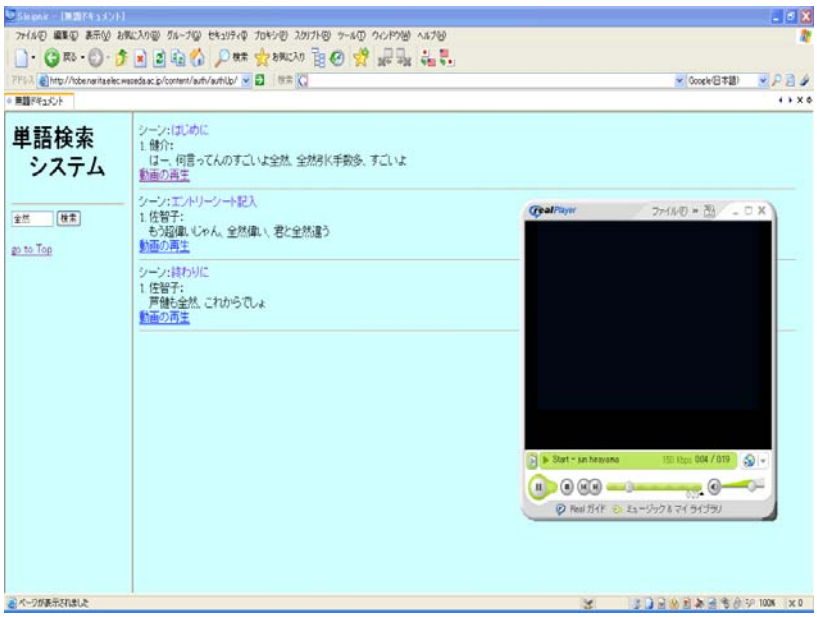

図 3.5.1　単語検索システム画面

3.6 シナリオ解説(辞書機能)について

シナリオ検索(辞書機能)を実装するにあたり、東京国際大学の川村よし子先生に共同研究を依頼し、「日本語読解支援システム　リーディング・チュウ太［1］」のデータを利用し、基本的な単語の意味を学習できるようにした。検索方法はシーン検索部分と同様に登場人物、場所、会話の種類からシーンを特定し、各シーン内のわからない単語を調べる。各シーンの文章はリーディング・チュウ太を利用してあらかじめ形態素解析を行い本システムに組み込んである。検索結果画面は真ん中に文章が表示され、辞書部分は右側に一覧表示される。本文中の調べたい単語をクリックすると該当する箇所に辞書部分が移動するようになっている。調べた単語は画面下の単語リストに加えられ、どの単語を何回調べたかわかるようになっている。

4　おわりに

現在のシステムでは、検索方法を、相手・場面・会話の種類で分類しているが、話し言葉を学習することに焦点を絞り、検索方法を話し言葉で生じる音の変化や会話の形式などで分類することより、教師・学習者にとってより実用的にシステムを利用できると思われる。また、映像の種類の増加、インターフェイスの改良などを行うことによって本システムを完成させていく予定である。

参考文献

［1］川村　よし子　リーディング・チュウ太　http://language.tiu.ac.jp/